

『マザーテレサ』を読んで
 二年一組 ●●●
 ボランティア活動を行ったあとは充実感が
 あった。まだ中学生であるわたしが、人々の
 役に立てたと思うとうれしくなった。
 今年は夏休みを利用して、母と叔母、いと
 ことわたしの四人で●●●県で起こった●●●災
 害のボランティア活動に一週間ほど出かけた
 炎天下での作業ということもあり、しんどか
 った。だが、一日の作業を終えて宿泊先に戻
 ったときに感じる「今日も一日がんばった」
 という思いは、心地がよかった。
 予定の一週間が終わり、家路についた。一
 生忘れられない夏休みになるだろうと、一つ
 のことをやり遂げた達成感に包まれていた。
 ●●●県でのボランティア活動のことを話し
 ているときだった。父に「おまえは何かを勘
 違いしていないか」と言われた。何を言われ
 ているのか全然分からなかった。わたしは人

のため、役に立つことをしてきた。それを話
すのがなぜ悪い、そう思った。口には出さな
かったが態度に出たのだろう、明るる日、書
斎から出てきた父は、無言で一冊の本を手渡
した。それはマザーテレサの伝記だった。
マザーテレサのことは知っている。インド
の貧しい人々のために一生をささげ、ノーベ
ル平和賞を受賞した女性だ。どうしてマザー
テレサの伝記をわたしに……、納得はできな
かったが、とりあえず読むことにした。
「なんと思いついていたのだろう。」読後
の率直な思いだった。人のために何かをする
ことがこれほど重いとは……。わたしがボラ
ンティアと思っていたのは何だったのだろう。
この夏、参加したボランティア活動は、昼
の作業が終わると、わたしたちは宿泊先に戻
った。部屋は冷房が入っていて涼しかった。
食事もおいしかった。お風呂にもゆつくりと
入れた。そして心地よく疲れた体と、充足し
た気持ちに包まれてわたしは就寝した。

だが、マザーテレサは自らの意志で貧民街
 に入り、彼らと生活をともにした。毎日二十
 四時間、人生の大半を彼らと同じ境遇に身を
 置いて生活を続けた。名誉も富も望まなかつ
 た。貧民街の人のためにだけ働いた。その行
 いこそ、奉仕と呼ぶに値する。時間になれば
 宿舎に戻り、日がたてば自宅に帰る。そして、
 自分のしてきたことを誇らしげに話す、その
 行為はボランティアごっこなのかもしれない。
 わたしは、ボランティアについて誤解をし
 ていたのではないか。人のために無償で働い
 ているのだから、ほめられて当たり前、認め
 られて当然、心の片隅にそんな思いがあつた
 にちがいない。お世話をしてあげているとい
 うおごりが、心の中に潜んでいたはずだ。被
 災地で暮らす人々の気持ちを理解できれば、
 現地での活動を軽々しく口にしないだろう。
 父に手渡された伝記は、うぬぼれていた心
 と、気がつかないうちに人を見下していた勘
 違いな気持ち戒めてくれた一冊となつた。